

モンタルジからロベール・ド・サン＝ルー＝アン＝ブレへ —『失われた時を求めて』¹における人の名—

青柳りさ

1. モンタルジの町

モンタルジは、上流ではセーヌ河につながりロワール河に流れ込むことになるル・ルワン (Le Loing) が町中に水路となって張り巡らされている小さなヴェニス (ガティネのヴェニス) と呼ばれる歴史的な美しい町であり、人口は現在1万5千人ほどである。



1427年にシャルル7世が宮廷をロワールのシノン城に移し、1589年のギース公が暗殺されたことによりヴァロワ朝が終わるまで、ロワールはフランスの政治・文化の中心として、常にフランス史の主役の座にあった。モンタルジは中世の城塞都市であり、かつてガティネ地方の中心 (chef-lieu) でもあった。1429年にはジャンヌ・ダルク、シャルル7世もモンタルジに入場しており、1853年には、『モンタルジと1427年の攻囲』²、1903年には、『英国軍によるモンタルジの攻囲 (1427)』³ という本もモンタルジに

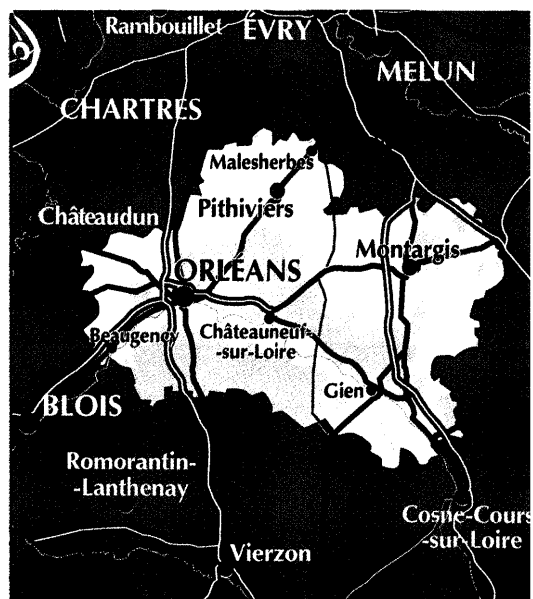


19 septembre 1429, Jeanne d'Arc et Charles VII font leur entrée à Montargis
 Peinture de Georges Thouvenot (détail) - Hôtel de ville de Montargis

シャルル7世、ジャンヌ・ダルク入場の図⁵

において出版されている⁴。歴史的に重要な戦略基地であった。

2006年夏、この地を訪れる機会があり、果たして1909年から1913年春 (秋) 頃までの『失われた時を求めて』の登場人物「サン＝ルー」の草稿のな



ロワレ県地図⁶

かの名前である「モンタルジ」とこの町に関連性があるのではないかと考えたことが、モンタルジの町について調べるきっかけとなった。

地図で見てもわかるように、この町はブルーストが志願兵として兵役時代を過ごしたオルレアンから60キロしか離れていない。ロワレ県も、小説の冒頭「コンブレ」のモデルであり作家の幼少期の思い出の地であるイリエ＝コンブレのあるユール＝エ＝ロワール県に隣接している。ブルーストがモンタルジの町を知らなかったということは考えられず、もしかしたら訪れたこともあるかもしれない。作品中のサン＝ルーの駐屯地であるドンシエールでの戦略談義と、戦略基地としてのモンタルジの重要性を考えるならば、草稿のなかのモンタルジという名前の由来がこの町である可能性は高い。

2. プレイヤッド版の索引から

『失われた時を求めて』のなかで「モンタルジ」が人名として登場するのは一箇所、シャルリュス氏の爵位の一つ「モンタルジ公子」である。

MONTARGIS (damoiseau de), un des titres de Charlus : III, 333. (IV, 1599)

ヴェルデュラン夫妻がカンブルメール氏から借りうけたラ・ラスプリエールの別荘での夜会で、ヴェルデュラン氏が、爵位が下であるという理由から、シャルリュス男爵をカンブルメール侯爵の下座に着けようとしたときに、シャルリュス氏は、自分は「ブラバン公爵であり、モンタルジ公子であり、オレロン、カランシイ、ヴィアレージオ、レ・デューヌ大公でもある」と蕩々と語る。

« Mais, expliqua M. Verdurin, blessé, c'est à dessein. Je n'attache aucune importance aux titres de noblesse, ajouta-t-il, avec ce sourire dédaigneux que j'ai vu tant de personnes que j'ai connues, à l'encontre de ma grand'mère et de ma mère, avoir pour toutes les choses

qu'elles ne possèdent pas, devant ceux qui ainsi, pensent-ils, ne pourront pas se faire, à l'aide d'elles, une supériorité sur eux. Mais enfin puisqu'il y avait justement M. de Cambremer et qu'il est marquis, comme vous n'êtes que baron... —Permettez, répondit M. de Charlus, avec un air de hauteur, à M. Verdurin étonné, je suis aussi duc de Brabant, damoiseau de **Montargis**, prince d'Oléron, de Carency, de Viareggio et des Dunes¹. D'ailleurs, cela ne fait absolument rien. Ne vous tourmentez pas, ajouta-t-il en reprenant son fin sourire, qui s'épanouit sur ces derniers mots : J'ai tout de suite vu que vous n'aviez pas l'habitude. » (III, 333. 強調は筆者、以下同様)

プレイヤッド版の注は、ここに名前が挙がるブラバン、オレロン、ヴィアレージオ、デューヌについては、歴史的背景まで述べて解説しているが、モンタルジ公子については、カイエ60に現れること、サン＝ルーのかつて（1912年のヴァージョン）の名前であったと記しているだけである。

1. Le titre de damoiseau de **Montargis** est noté dans le Cahier 60 (f°1 v°), ainsi que ceux de marquis d'Oléron et de duc d'Agrigente (f° 56 r°). Il y eut des ducs de Brabant du XII^e au XV^e siècle ; le titre passa alors dans la maison de Bourgogne puis dans celle d'Autriche. Le titre damoiseau de Commercy avait été adopté au XV^e siècle par les seigneurs de Commercy, seuls à s'en servir. **Montargis** était le nom de Saint-Loup dans la version de 1912 du roman. Le titre d'Oléron, avec une incertitude, prépare l'adoption de la fille de Jupien qui s'appellera Mlle d'Oléron (voir *La Prisonnière*, p. 815). Elle épousera Léonor de Cambremer, dont le prénom est une anagramme d'Oléron (Alain Roger, *Proust et les noms*, Denoël, 1985, p. 159). Viareggio est une ville d'Italie. Nicolas Oudinot, maréchal d'Empire, était duc de Reggio. La bataille des Dunes fut gagnée en 1658 par Turenne sur l'armée espagnole aux alentours de Dunkerque. Carency ne paraît pas appeler de commentaire. (III, 1532-1533)

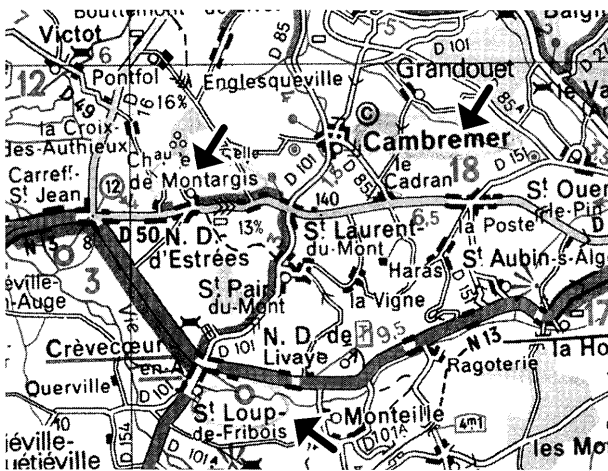
しかしモンタルジが代々王家（オルレアン家）の封土であったことを考え合わせれば、シャルリュス氏の言うモンタルジ公子というのはロワレ県のモン

タルジをさしているとしか考えられない。

プレイヤッド版の索引は人名のモンタルジに加え、地名のモンタルジを2箇所挙げ、これをノルマンディーとしている。

MONTARGIS, en Normandie : I, 21a (1102) ;
III, 1090. (IV, 1664)

確かにノルマンディーの地図⁷を細かく見ると、モンタルジ城とモンタルジ礼拝堂、サン＝ルー・ド・フリボワ、カンブルメールという地名が近接して存在する。



サン＝ルーが最初に登場するのは、ノルマンディーに位置づけられる架空のリゾート地、バルベックの海岸なので、このノルマンディーのモンタルジというのは、ある意味ではうってつけのシチュエーションである。しかしこの鉄道も通っていない小さな村の名前からプーレストが重要人物の命名をしたとは考えにくい。果たしてプーレストがこの地を知っていたかどうかさえ疑わしい。

そこでまず索引に挙げられている箇所のテキストを確認することから始めたい。「I, 21a (1102)」というのは、家族の友人であるスワンがヴィルパリジ夫人の知り合いでもあったということについて、コンブレの家族の様々な思いや評価が述べられる箇所のダクティロ原稿 (1910-1912) である。

[...] ces notions que nous retrouvons [p. 19, 16^e ligne], que nous écoutons. Ma grand-mère n'avait à loger dans l'enveloppe matérielle de Swann aucun de ces noms de ses amis royaux, aucun écho de ces fêtes intimes et fastueuses où il brillait. Comme le médecin major du régiment de **Montargis** qui en invitant son client, le duc de Borodino, dans sa petite maison de Chartres, toutes les semaines à dîner, croyait recevoir un bon garçon, un peu solennel, probablement ruiné, ne fréquentant plus les gens de son monde parce qu'il avait l'élégance de n'en parler jamais et que d'ailleurs il n'eût pas été sans cela si aimable pour un médecin militaire et ne se fût pas déclaré «très honoré» de dîner avec l'obscur laryngologue de passage, mes parents n'avaient rempli le visage de Swann, où aucun renseignement personnel sur lui ne venait interrompre le signe, que de tout le doux loisir plein de bonhomie de cette vie provinciale et campagnarde, des relations hebdomadaires de bon voisinage. [...] (I, 1102, dactyl.1, dactyl.2)

スワンをたどって「モンタルジ連隊の軍医が毎週ボロディノ公爵を夕食に招きながら、彼のことをおそらく破産していてもはや自分のもといた世界とは交流のない少々もったいぶってはいるが人のいい青年を受け入れていると思っているように」と書かれている。ボロディノ公爵というのは、小説中では、サン＝ルーの駐屯地であるドンシエールの連隊の隊長である。小説のなかとはいえ、当時の人々にとってモンタルジの連隊といえば、ロワレ県のモンタルジしかあり得なかったはずである。

「III, 1090」の方は、バルベック二度目の滞在時の語り手とアルベルチヌとの会話の草稿である。なお、このカイエ46 (1912-1913) には人名の「モンタルジ」もまだ残っている。

Je lui demandai de revenir à Balbec mais elle ne pouvait pas. «C'est ennuyeux comme cela vous êtes pour moi une voyageuse, j'aurais aimé vous avoir avec moi en wagon — Hé bien je vais venir avec vous jusqu'à **Montargis**³ et je reprendrai là le train qui va en sens inverse. C'est entendu. — Alors partons tout de suite. — Laissez-moi enlever au moins mon caoutchouc. — Mais non c'est cela qui vous fait voyageuse.

Je vous le déferai moi-même dans le wagon.》
(III, 1090, *Cahier 46*)

3. C'est l'ancien nom de Saint-Loup qui semble
revenir ici. (III, 1876)

「私は彼女にバルベックに戻ってくれるように頼んだが駄目だった […]「じゃあモンタルジまで一緒に行ってそこで逆向きの列車に乗ることにしましょう」という会話から、パリからモンタルジを経由してバルベックへむかう、モンタルジは乗換駅である、という路線が想像される。さらにカイエ46に続くカイエ72には、プルースト自身がバルベックの軽便鉄道の路線図を書いているのだが、そこには、ドンシエール・リヴ・ゴージュ、ドンシエール・モンペイルという駅名が記されている(III,1246)。また決定稿のドンシエールも「バルベックからはそう遠く離れていない小さな都市のひとつ」(II, 369)となっている。ドンシエールとモンタルジは重なり、このような理由からプレイヤード版の索引はモンタルジをノルマンディーに位置づけたのだろう。注の方は、サン＝ルーのかつての名前はここから来ているらしいとしているだけである。

モンタルジは、将校であるサン＝ルーのもとの名前であり、サン＝ルーが駐屯するドンシエールのもとの名前であり、それが決定稿において、シャルリュス氏の王家の血筋をひく称号の一つである「モンタルジ」となったのである。これはロワレ県のモンタルジ以外には考えられない。草稿のなかでロワレ県のモンタルジはノルマンディーに移動し、たまたま後になってよくよく地図を見ると、モンタルジ、サン＝ルー、カンブルメールという地名がノルマンディーにもあったのではないか。もし、プルーストがこの三つの地名がノルマンディーに実在することを知ったならば、命名は作家自身にとってもさらに予定調和的なものに思われたかもしれない。

3. フランス人の感覚

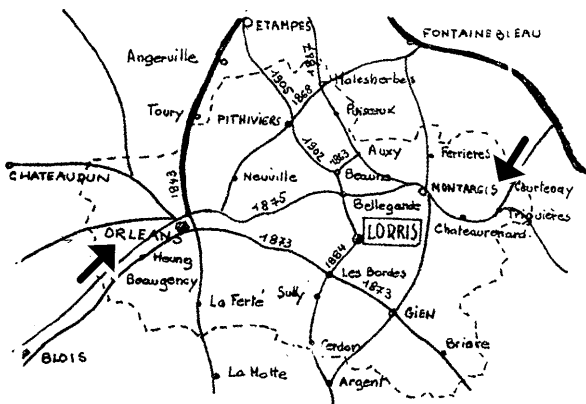
そのようなことを考えてモンタルジ近郊に別荘を

もつ友人に話したところ、オルレアンとモンタルジは遠い、プルーストが兵役時代ここを往来したということなんてあり得ない、関連性もあるはずがないという答えが返ってきた。モンタルジはパリのリヨン駅から都市間快速で1時間少々、オルレアンはオステルリッツ駅からやはり都市間快速で1時間少々、しかしモンタルジーオルレアン間は連絡がなく、電車を使うと乗り換え等で4-5時間かかってしまう。モンタルジというのは草稿のなかの名前であるため、一般の読者に馴染みのない人名である。それに加えてこのような現在の鉄道路線の事情から、プルーストとモンタルジ、あるいはオルレアンとモンタルジの名前を結びつけることがこれまでなされなかったのだろう。

4. プルーストの時代のモンタルジ

それではプルーストの時代はどうだったのだろうか。モンタルジとオルレアンは現在よりも近かったのではないだろうか。今は田舎の地方都市にすぎないが、モンタルジはかつてはもっと重要な町だった。

- 1) 1853年、1903年に出版された二つの資料については先に述べた通りである。
- 2) プルーストの時代には、パリーオルレアン、パリーモンタルジのみならず、モンタルジーオルレアン間にも鉄道路線があった。この路線は1875年に開通したものであり、ロリスの旅行案内所で入手した『ロリスの鉄道』に、当時の近辺の鉄道の整備の状況を見ることができる⁸。



- 3) また1895年の「モンタルジとその近郊の地図 (Environs de Montargis : Carte de manœuvres)」(フランス国立図書館所蔵)によれば、パリーモンタルジ間には国道7号線(パリーリヨン)が、モンタルジーオルレアン間には国道60号線(オルレアンーナンシー)が走っている。

つまりモンタルジーオルレアン間の60キロは現在よりもずっと近く感じられていたのである。

- 4) さらに、タディエ(が引用するクロヴィス・デュヴォー)によるとプルーストの時代の兵役志願兵は、セヌ地方からは、モンタルジ、オルレアン、プロワに派遣されており⁹、この三つの駐屯地(前掲のロワレ県地図参照)は、とりわけパリの人々にとっては知らない者はないという場所だったことがわかる。

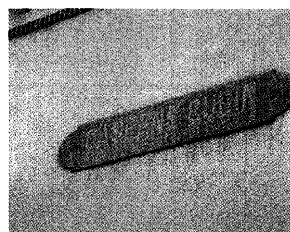
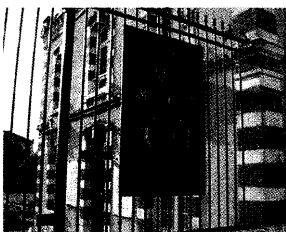
オルレアンとモンタルジは近かった。そしてモンタルジは重要な戦略基地であり、当時のパリの人々にとって今日よりずっと身近に感じられていた。「スワン家の方」と「ゲルマントの方」が実は離れていなかったように、今日パリの人々にとって遠くに感じられるこの「二つの方」は実はとても近いものだったのだ。

サン＝ルーの駐屯地であるドンシエールの記述にプルーストは自らのオルレアンでの兵役時代の体験を多く取り込んでいる。ドンシエールのモデルは、オルレアン、フォンテヌブロー、そしてプロヴァンとされているが、そのドンシエールもとの名はモンタルジであり、あるいはヒーローとして戦略を展開する親しい友人の名前がモンタルジであったとするならば(プルーストはノルマンディーのモンタルジを知っていたかもしれず、それも念頭にあったかもしれないが)、プルーストを含め当時のほとんどすべての人々が思い浮かべるのは、このロワレ県のモンタルジ以外にはやはり考えられない。

5. モンタルジから ロベール・ド・サン＝ルーへの変化

とはいえ、列車にせよ道路にせよ、二時間程度のこの町をプルーストが訪れたことがあるという記述はどこにも残っていない。草稿のなかの登場人物モンタルジの名前のスルスがロワレ県のモンタルジであるという可能性が、ノルマンディーのモンタルジの可能性を否定するものでもない。

モンタルジがサン＝ルーに変わっていくのは1912年から1913年頃、カイエ35からダクティロ原稿、プラカールにかけての時期である。この時期は集中的に『ソドムとゴモラ』の執筆がなされた時期であり、続くカイエ34ではアルベルチヌ、カイエ54ではシャルリュス、モレルといった主要人物の名前が確定していく時期である¹⁰。一方、先程地図で確認した「カンプルメール」という名前が確定するのは1911年から1912年にかけてのカイエ18であ



モンタルジの陸軍学校(旧キュダン兵舎)

るが¹¹、この時期はプーレストが夏のヴァカンスをノルマンディーのカブールで過ごしていた時期である。カンプルメールの村は、カーンとリジューの間に位置し、カブールからも直線で22キロほどの当時からかなり大きな村であった。ノルマンディーの貴族カンプルメールの名前の決定にあたって、プーレストはこの村のことを知っていた、あるいは調べたであろうことは、命名の際、実在の人物や地名を一つひとつ確認するプーレストの姿勢を考えればほぼ疑いないだろう。先程、地図に確認したように、カンプルメールの近郊に、作家が作中人物に採用している「モンタルジ」の名を持つモンタルジ城、モンタルジ礼拝堂がある。サン＝ルー＝ド＝フリブワはそこから3キロも離れていない。

当時、『失われた時を求めて』のドンシエール駐屯地の場面を読んだ人々が、サン＝ルーではなくモンタルジという名前を目にしたならば、想像するのは間違いなくロワレ県のモンタルジであったはずである。しかしこのことが逆に、モンタルジという名前を変更していく大きな動機の一つとなっていたのではないだろうか。プーレスト自身、「この本の登場人物には鍵などありません、と言うよりむしろ、一人の人物に八つあるいは十の鍵があるといった方がいいかもしれません¹²」と言っているが、モンタルジという名前はあまりに端的に一つの町を指定してしまうのである。

プーレストの創作作法においては、具体的な事例の挿入と明白なモデルの痕跡の削除がしばしば小説推敲の最終段階で行われ作品を完成へと導く。バルトは名前の誕生を作品の誕生としたが¹³、モンタルジからサン＝ルーへの名前の変更とサン＝ルーという名前のいくつもの鍵は、作品の成立と大きく連動するものであるように思われる。

6. ロベール・ド・サン＝ルー

セルジュ・ゴベールは「ROBERT SAINT LOUP」と「PROUST+ALBERTINE」がきれいなアナグラムになっていることを指摘した¹⁴。作品の中での

サン＝ルーの位置を示唆しているようにも思える。

一方、プーレストの母親が息子を「ルー（狼さん）」と呼んでいたことはよく知られている。プーレストにとってこの「ルー」という音は、母の思い出と結びつく幸福な時代を喚起させる音であったはずである。書簡集第一巻（1880-1885）から母親の呼びかけをひいてみた¹⁵。

《Cher petit》(6 septembre 1888), 《**Cher petit pauvre Loup**》(27 septembre 1889), 《Cher petit》(12 septembre 1889), 《Cher petit》(13 septembre 1889), 《Mon bien cher petit》(14 décembre 1889), 《**Loup**》(Premeir semestre 1890), 《Cher petit》(23 avril 1890), 《Cher petit》(28 avril 1890), 《Cher petit》(8 juin 1890), 《Cher petit》(26 juin 1890), 《Cher petit》(juillet 1890), 《Cher petit》(1^{er} août 1890), 《Cher petit》(5 août 1890), 《Mon pauvre cher petit》(10 août 1890), 《Mon cher pauvre petit》(11 août 1890), 《Cher petit》(14 août 1890), 《Cher petit》(18 août 1890), 《Cher petit》(18 août 1890), 《Cher petit》(19 août 1890), 《**Loup**》(21 août 1890), 《Cher petit》(22 août 1890), 《Cher petit》(28 août 1890), 《**Loup**》(17 août 1892), 《Mon petit Marcel》(1^{er} septembre 1892), 《Mon chéri》(août 1893), 《Cher petit》(11 septembre 1894), 《Mon chéri》(20 août 1895), 《Mon chéri》(23 août 1895)

記述として残っているものはそれほど多くはないが、それは弟にではなく長男のマルセルに向けられたものであり、息子をいとおしむ母の声が聞こえてくるようである。

「ロベール」については、プーレストの周りにも何人ものロベールがいる。とりわけ、小説のなかではその存在を消されてしまった弟のロベール・プーレスト、リセ・コンドルセ時代からの友人でありジャーナリストであったロベール・ドレフェュス、オルレアンの兵役時代に知り合い、その後も生涯友人として交流があった外交官のロベール・ド・ビイイについては、プーレスト自身が「私の大好きな三人のロベール」と言っている（ここにはロベール・ド・モンテスキューは含まれない）。自分を呼ぶ母の声と、大好きな友人たちの名が、ロベール・ド・サン＝ルーの「サン（Saint）」、あるいは「ド・サン（de Saint-）」によっ

てつながれて一つの名前となっている。

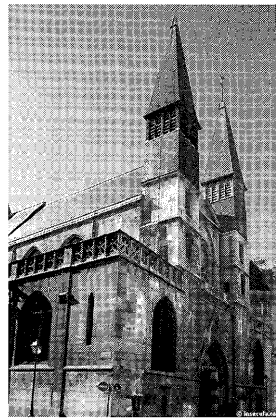
7. フランスのなかのサン＝ルー

フランスで、ルーの名前で最も知られているのは、アッティラとフン族から町を守ったトロワの司教のサン＝ルー¹⁶、第3回オルレアン公会議の議長を務めたりヨンの司教サン＝ルー¹⁷、オルレアンの王家の血筋をひき、数々の奇跡を起こしたとされるサンスの大司教サン＝ルー (Saint-Leuとも呼ばれる)¹⁸である。

フランス中に散見されるサン＝ルーという地名 (Commune) の多くは、とりわけこのトロワの司教とサンスの大司教に由来するようである。以下に、フランス全土に存在するサン＝ルーの名前を持つコミューンを挙げておく。

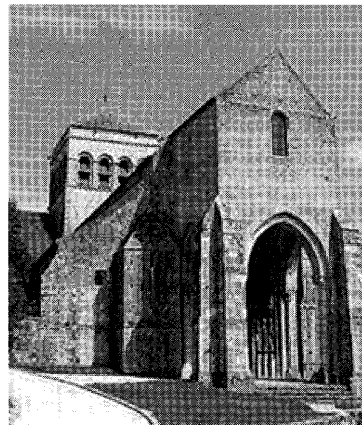
Saint-Loup (Allier), Saint-Loup (ancienne commune française de l'Aveyron, aujourd'hui intégrée à Chausse-et-Diège), Saint-Loup (Charente-Maritime), Saint-Loup (Creuze), Saint-Loup (ancienne commune française de l'Eure-et-Loir, aujourd'hui intégrée à La Bourdinière-Saint-Loup), Saint-Loup (Jura), Saint-Loup (Loir-et-Cher), Saint-Loup (Manche), Saint-Loup (Marne), Saint-Loup (Nièvre), Saint-Loup (Rhône), Saint-Loup (Tarn-et-Garonne), Saint-Loup, (lieu-dit de la commune de Pompaple en Suisse), Saint-Loup Cammas (Haute-Garonne), Saint-Loup-de-Buffingy (Aube), Saint-Loup-de-Fribois (Calvados), Saint-Loup-de-Gonois (Loiret), Saint-Loup-de-Naud (Seine-et-Marne), Saint-Loup-des-Chaumes (Cher), Saint-Loup-des-Vignes (Loiret), Saint-Loup-de-Varennes (Saône-et-Loire), Saint-Loup-d'Ordon (Yonne), Saint-Loup-du-Dorat (Mayenne), Saint-Loup-du-Gast (Mayenne), Saint-Loup-en-Champagne (Ardennes), Saint-Loup-en-Comminges (Haute-Garonne), Saint-Loup-Géanges (Saône-et-Loire), Saint-Loup-Hors (Calvados), Saint-Loup-Lamairé (Deux-Sèvres), Saint-Loup-Nantouard (Haute-Saône), Saint-Loup-sur-Aujon (Haute-Marne), Saint-Loup-sur-Semouse (Haute-Saône), Saint-Loup-Terrier (Ardennes)
(Wikipedia.fr より)

ブルーストと関わりのあると思われる「サン＝ルー」をいくつか挙げてみると、パリのサン＝ドニ通りにあるサン＝ルー教会 (Leu-et-Saint-Gilles) がある。この教会のチャペルは、サンスのサン＝ルーとサン＝ジル¹⁹にささげられている。



サン＝ルー教会²⁰

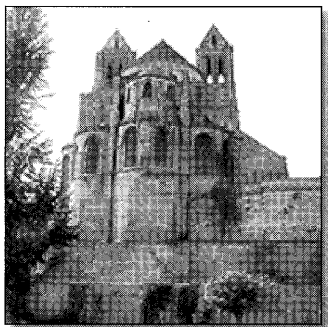
プロヴァンの近く、イリエ＝コンブレから約12キロのところにある、サン＝ルー＝ド＝ノー教会 (Saint-Loup-de-Naud) も、サンスの大司教サン＝ルーに由来し、その彫像も有している。ブルーストは何度も訪れているようである²¹。



サン＝ルー・ド・ノー教会とサンスのサン＝ルー²²

また、百年戦争当時、ジャックリーの乱 (1358年) が起こった地として知られる、オワーズ県のサン＝ルー・デスラン村 (Saint-Leu-d'Esserent) も、サンスの大司教サン＝ルーに由来するようである。ブルーストは、1913年4月21日に、ビバスコ兄弟、ジョ

ルジュ・ド・ロリスとともにこの村を車で訪れており²³、同じ年7月の母親宛の書簡では、サン＝ルー・デスランの教会での出来事についても触れている²⁴。さらに1913年のエマニュエル・ビベスコ宛の書簡でもこの時の散策に触れており²⁵、1918年ストロース夫人宛の書簡でも再び回想している²⁶。



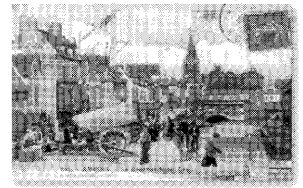
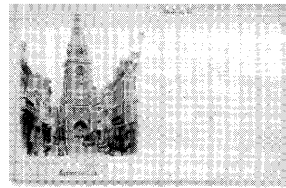
サン＝ルー
＝デスラン教会²⁷

フォンテヌブロー近郊、サモワのサン＝チレール・サン＝ルー教会 (Eglise Saint-Hilaire - Saint-Loup-de-Samois) もまた、サンスの大司教に由来するものであり、このフォンテヌブローの地もブルーストにとっては親しい場所であった。



サン＝チレール・
サン＝ルー教会²⁸

ブルーストのラスキン巡礼地の一つであるアミアンにも、サンスの大司教サン＝ルーに由来するサン＝ルー教会 (Eglise Saint-Leu) とサン＝ルー地区 (Quartier Saint-Leu) がある。大聖堂の北側、ソム河の支流である小さな運河が網の目のように張り巡らされた一角で、中世には織物業の中心地として栄えた。このサン＝ルー地区に入るドダヌ橋 (Pont de la Dodane) から大聖堂の全景を一望できる。



サン＝ルー教会 (1890-1896)
サン＝ルー地区 (1906-1908)
北側サン＝ルー地区からみたアミアン
大聖堂 (1906-1908)²⁹

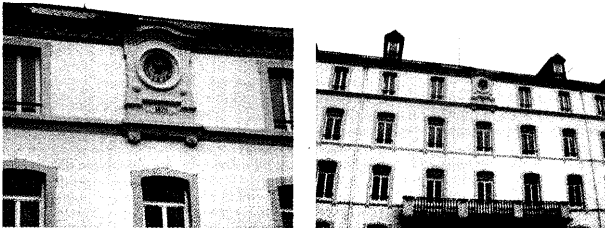
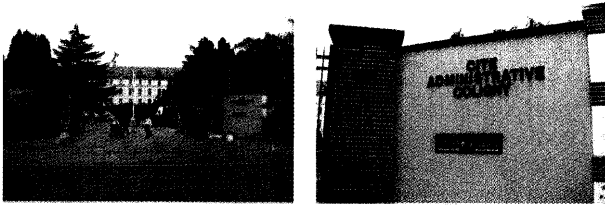
なお、フランス人の間ではよく知られているモンペリエ近郊の景勝地、ピック・サン＝ルー (Pic Saint-Loup) については、トロワのサン＝ルーかサンスのサン＝ルーかという論争があったが、トロワのサン＝ルーで決着したという説、中世の伝説上の3人のルー兄弟の名を取ったという説があるが、後者の伝説の方がよく知られている。

8. 兵役時代 (オルレアンのブルースト)

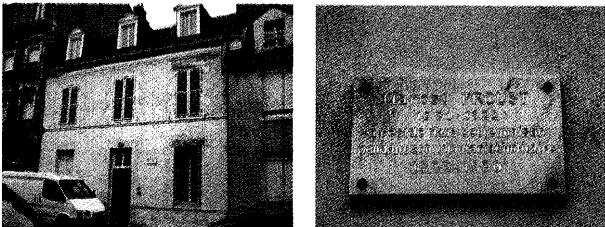
モンタルジが戦略基地であったことは先に述べたが、オルレアンはそれにも増して重要な戦略基地である。ブルーストが兵役時代を過ごした地であり、ドンシエールのモデルの一つでもある。

クロヴィス・デュヴォー³⁰、コルブ³¹、タディエ³²の記述を参考に、ブルーストの兵役時代を辿りたい。1889年11月15日、ブルーストはオルレアンに赴く。先にも述べたが、セーヌ県の志願兵は、プロワかオルレアンかモンタルジに編入された。80名の志願兵がフォーブール・バニエ通り131番地、コリニー兵舎 (Caserne Coligny, 131, Faubourg Bannier) に入った。第一大隊第二中隊第76兵舎である。

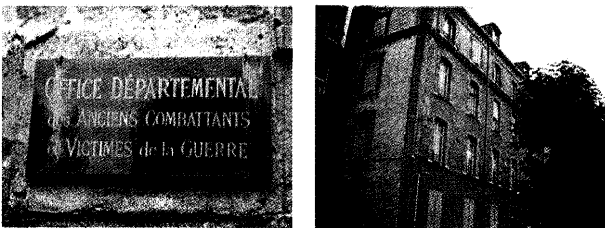
喘息の発作が仲間たちの迷惑になるということでブルーストは上官に下宿をするよう命じられ、斜め向かいのフォーブール・バニエ通り92番地、ランヴォワゼ夫人宅に住むことになる。



バニエ兵舎→コリニー兵舎→コリニー行政都市



プーレストが下宿していたランヴォワゼ夫人宅



レゼルヴォワール通り→マルセル・プーレスト通り

このランヴォワゼ夫人の名は書簡集にも見られるし、『ジャン・サントウイユ』にも同じ名前が登場する。『ジャン・サントウイユ』には幸福な兵役時代と兵舎の仲間たち、あるいは下宿に仲間たちを招待しパンチを御馳走するなど、書簡集にも確認できるエピソードが採用されている。

また兵役時代に知り合った最も親しい友人はロ

ベール・ド・ビイイである。オルレアン第30兵舎(かつてのデュポルターユ界隈とデュノワ界隈の間で、当時はレゼルヴォワール通り、現在マルセル・プーレスト通り)に属していた。1890年2月、ロワレ県知事ブグネール氏主催の晩餐会で二人は知り合い、その後、自由政治学院(現在のパリ政治学院)でも再会、生涯の友人となる。出会った頃のロベール・ド・ビイイへの呼びかけを書簡集からひいてみた³³。

《Mon cher ami [...] Votre petit, Marcel P》(8-12 août 1892), 《Mon petit Robert [...] votre ami Marcel.....》(29 août 1892), 《Mon petit Robert [...] je vous embrasse ainsi que mon petit Edgar Aubert》(1^{er} janvier 1893), 《....mon petit Robert [...] mon cher ami....》(23 septembre 1892), 《Mon cher petit Robert [...] Je suis votre très ami.....》(10 janvier 1893), 《Mon cher petit Robert [...] Je vous embrasse de tout mon cœur et vous supplie d'écrire à votre petit Marcel qui se dessèche d'ennui après vous.》(26 janvier 1893), 《Mon cher petit Robert [...] Votre petit ami de toujours.....》(9 juin 1893), 《Mon cher petit Robert》(septembre 1893), 《Mon cher petit Robert [...] Tout à vous Robert》(5 novembre 1893), 《Mon cher Robert》(5 novembre 1893), 《Cher Robert [...] Mon souvenir affectueux....》(17 avril 1894), 《Mon petit Robert [...] Votre, M.P》(septembre 1895)

ずっと「あなた(vouvoyer)」を通し、ある一定の距離を保ちながらも愛情にあふれた親しげな様子と、その後次第に距離が離れていく様子を見て取ることができる。

「ロベール・ド・サン＝ルー」という名前は、その頃の大好きだった友人とその頃の自分への母の呼びかけを合体させる。一度失われそして再び獲得された楽園を象徴しているかのようである。

さらにオルレアンの地名もふたたび作品へと収穫されている。クロヴィス・デュヴォーはオルレアン時代のプーレストの作品への影響を18ページにわたって指摘・分析しているが³⁴、それをふまえたタディエの記述から、その例を引用したい。

例によって社交的な性格だから、友情とは言え

ないまでも […]、仲間づきあいの環もできていた。とりわけオルレアンの地理は、心の中に刻み込んで持ち帰った。パリから汽車で2時間、人口6万人の閑静な町は、当時はやはり部隊中心の生活がくり広げられていて、近いとはいえ異色の町だった。フォーブル＝バニエ通りとボン＝ザンファン通りは『ジャン・サントウイユ』に出てくるし、ヴァレフスキが泊まっていたレピュブリック広場は、『失われた時を求めて』ではドンシエールでポロディノが住む並木のある散歩道になる。サントライユ通りやブルトニ通りなどは、コンブレーに移される。オルレアンのごく初期の司教で、最初の大聖堂を建立したサン・トゥーヴェルトの場合は、『スワン家の方へ』で侯爵夫人の名前になる。町には、サン＝ジャン＝ド＝ブレとの境に、サン＝ルーの界隈がある。シャルリュスは、オルレアンの大聖堂を「フランスで一番不格好」とけなす一方で、カピュ館については、「ディアヌ・ド・ボワチエの館」と称して絶賛する。由緒ある実在の名称が創作された名称と混じり合い、想像力の補いとして置き換えられ、ゲームのような楽しさをともなう³⁵。

この兵役時代を、クロヴィス・デュヴォーは「幸福な」と言い³⁶、タディエは「大した不幸もなく大した喜びもない」と形容しているが、最終的には、タディエも言うように「気持ちのいい思い出」となり³⁷、その後のさまざまな記述の中では幸福な時代となっていくようである。記憶のなかで名前もまた昇華されていったのかもしれない。

9. ドンシエールとオルレアン

ドンシエールは、オルレアンと、プロヴァンと、フォンテヌブローとを合成したものであるとされている。パリーオルレアン間は当時列車で2時間程度、プルーストは兵役期間中も日曜ごとにパリに戻っていた。そしてヴァカンスにはオルレアンからカブールへ赴いている。つまり、パリ、オルレアン、カブールは、プルーストの行動範囲であった。このことを念頭において、作品からドンシエールの町の様子を引用してみたい。

Saint-Loup ne pouvait pas depuis longtemps venir à Paris, soit, comme il le disait, à cause

des exigences de son métier, soit plutôt à cause de chagrins que lui causait sa maîtresse avec laquelle il avait déjà été deux fois sur le point de rompre. Il m'avait souvent dit le bien que je lui ferais en allant le voir dans cette garnison dont, le surlendemain du jour où il avait quitté Balbec, le nom m'avait causé tant de joie quand je l'avais lu sur l'enveloppe de la première lettre que j'eusse reçue de mon ami. ① C'était, moins loin de Balbec que le paysage tout terrien ne l'aurait fait croire. ② une de ces petites cités aristocratiques et militaires, entourées d'une campagne étendue où, ③ par les beaux jours, flotte si souvent dans le lointain une sorte de buée sonore intermittente qui, — comme un rideau de peupliers par ses sinuosités dessine le cours d'une rivière qu'on ne voit pas — révèle les changements de place d'un régiment à la manœuvre, que l'atmosphère même des rues, des avenues et des places, a fini par contracter une sorte de perpétuelle vibratilité musicale et guerrière, et que le bruit le plus grossier de chariot ou de tramway s'y prolonge en vagues appels de clairon, ressassés indéfiniment aux oreilles hallucinées par le silence. ④ Elle n'était pas située tellement loin de Paris que je ne pusse, en descendant du rapide, rentrer, retrouver ma mère et ma grand'mère et coucher dans mon lit. Aussitôt que je l'eus compris, troublé d'un douloureux désir, j'eus trop peu de volonté pour décider de ne pas revenir à Paris et de rester dans la ville ; ⑤ mais trop peu aussi pour empêcher un employé de porter ma valise jusqu'à un fiacre et pour ne pas prendre, en marchant derrière lui, l'âme dépourvue d'un voyageur qui surveille ses affaires et qu'aucune grand'mère n'attend, pour ne pas monter dans la voiture avec la désinvolture de quelqu'un qui, ayant cessé de penser à ce qu'il veut, a l'air de savoir ce qu'il veut, et ne pas donner au cocher l'adresse du quartier de cavalerie. Je pensais que Saint-Loup viendrait coucher cette nuit-là à l'hôtel où je descendrais afin de me rendre moins angoissant le premier contact avec cette ville inconnue. ⑥ Un homme de garde alla le chercher, et je l'attendis à la porte du quartier, devant ce grand vaisseau tout retentissant du vent de novembre, et d'où, à chaque instant, car c'était six heures du soir, des hommes sortaient deux par deux dans la rue, titubant comme s'ils descendaient à terre dans quelque port exotique où ils eussent momentanément stationné. (II, 369-370)

この町は、「バルベックからそう遠くない」—①

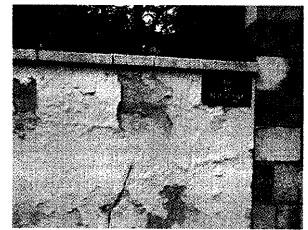
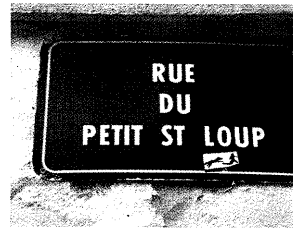
のだが、その土地の風景はバルベックの近郊のように見えず、「広々とした平野に囲まれた貴族的で軍隊的な都市のひとつ」—②である。そして「晴天の日にはしばしば、遠くに間歇的に響きを発する雲がたなびく」—③。ノルマンディーにボースあるいはシャンパーニュの風景が合体していくさまが見てとれる。「この町はパリからそう遠くはなく、急行から降りて引き返せば、母や祖母と顔を合わせ自分のベッドで寝ることができる」—④。モデルになったオルレアン、プロヴァン、フォンテヌブローの三つの都市であれば可能だが、バルベックをノルマンディーのリゾート地に位置づけて、先に示したカイエ72の路線図のドンシエールをあてはめるなら、往復は不可能な距離となる。語り手は続ける。「しかしポーターが私のスーツケースを馬車に運ぶのをとめる気力もなく [...] 騎兵隊の兵営の住所を馭者に告げてしまう」—⑤。週末の休暇をおえてオルレアンに戻ってきたプルーストの様子が垣間見えるようである。「衛兵がサン＝ルーを呼びに行き、私は兵営の門のところで待ったのだが、その船舶のような大きな建物の前には11月の風が音を立てて吹きつけ、夕方の6時頃だったので、ひっきりなしに男たちが二人ずつ連れだつてふらふらと現れた。それはしばらく停泊しているどこか異国の港にでも上陸するようにも見えた」—⑥。この風景はモンタルジの兵営というより、先の写真で紹介したオルレアンの駅から3キロほどのところにあるフォーブール・パニエ通りのコリニーの兵営とその斜め向かいのプルーストの下宿の光景そのものである。

10. 兵役時代 (オルレアンのサン＝ルー)

オルレアンは、サンスの大司教となったサン＝ルーの生地であり、その周辺には彼とその一族にちなんだ地名が多く残っている。

町のなか、大聖堂の裏手には、プチ・サン＝ルー (Rue du Petit Saint-Loup) という通りがある。

そして、オルレアン近郊にもサン＝ルーの名を持つ場所が散見される。オルレアンから東へ、

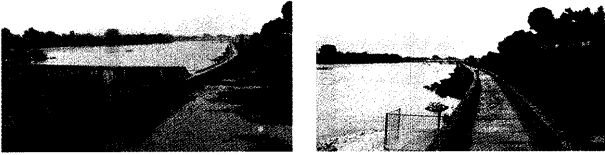


オルレアンのプチ・サン＝ルー通り

ブーローニュ通り (Rue de Boulogne) からフォーブール・ブーローニュ通り (Rue du Faubourg Bourgogne) を通って隣町のサン＝ジャン＝ド＝ブレ (Saint-Jean-de-Braye) へ向かうちょうど中間点に、ブルゴーニュ・サン＝ルー (Bourgogne Saint-Loup) という地域があり、サン＝ルー広場 (Place Saint-Loup)、サン＝ルー溪谷公園 (Parc du Vallon St-Loup)、サン＝ルー港通り (Rue du Port Saint Loup)、1882年に建造されたサン＝ルー礼拝堂 (Chapelle Saint-Loup) がある。サン＝ルーのバス停を降りると、右手がサン＝ルー港通り、左手がサン＝ルー溪谷公園、オルレアン寄りにサン＝ルー礼拝堂である。



サン＝ルー港通りからサン＝ルー港へ



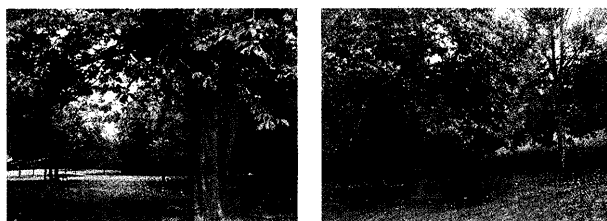
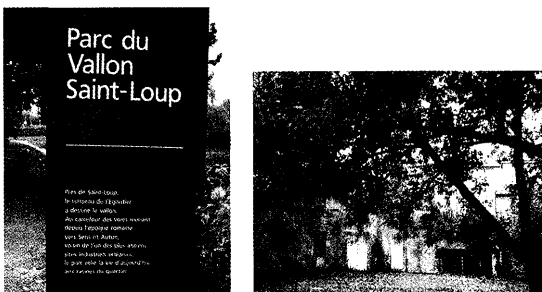
サン＝ルー港から西へオルレアン方向を望む



サン＝ルー港から東へサン・ジャン方向を望む



サン＝ルー港からみたロワール河



サン＝ルー溪谷公園



サン＝ルー礼拝堂

サン＝ルー港通りはロワール河へ向かう小さな通りで、船着き場からの眺めは非常に美しい。線路が引かれるまでは港は交易の要であった。

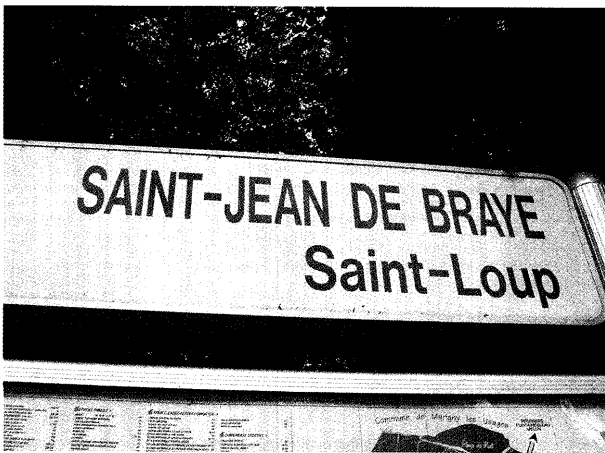
ここまでブルストの下宿から歩いて3キロほどで、オルレ안의街の中心部からブルストの下宿までとほぼ同じ距離である。クロヴィス・デュヴォーは、ブルストがたとえこの界限まで来ていなかったとしても、この地名を耳にしなかったはずはないと述べている³⁸。オルレアンからブルゴーニュ・サン＝ルーを抜けてサン＝ジャン・ド・ブレまでのロワール河沿い、あるいは川のなかの遊歩道は格好の散策コースである。ブルストは週末ごとにパリにもどっていたようだが、それにしても1年間をオルレアンで過ごしたわけだから、このような美しい散策コースを訪れなかったとは言い切れず、確かに少なくとも、ブルゴーニュ・サン＝ルー界限の地名を知らなかったとは考えられない。実際、1907年7月になるが、弟のロベール・ブルスト宛の手紙の中で、「僕の夢はリラダンかオルレ안의近くのオリヴェかへ行って君と舟遊びをすることだ³⁹」と書いている。このオリヴェ（ここにも兵営があった）というのは、オルレアンから少し南に位置し、そのすぐ南にはサン＝チレルという見慣れた名前もあ



オルレアン近郊⁴⁰

る。これよりさらに近いオルレアン郊外の絶好の散策コースをプーレストが見逃していたとは考えにくいからである。

しかしなによりも印象に残ったのは、バス停や案内板の標識である。サン＝ルーの名前は「ロベール・ド・サン＝ルー＝アン＝ブレ」である。



サン＝ルーのバス停とサン＝ルーの案内板の標識

「サン＝ジャン・ド・ブレ、サン＝ルー (Saint-Jean de Braye, Saint-Loup)」という表示が、ブルゴーニュ・サン＝ルーの至る所に見られる。「サン＝ルー＝アン＝ブレ (Saint-Loup-en-Bray)」という小説の登場人物の名前との類似は、「de Braye」から「en Bray」と綴りは少し変わるのだが、それでも一目瞭然である。「Braye」は魚を追い込む柵、仕掛けを意味し、ロワール河畔のこの地には「de Braye」のつく地名は多い。一方、「Bray」の方はこれとは

逆に溪谷を意味し、この名をもつ小地方がノルマンディー北部に存在する。ここでもノルマンディーとオルレアンが結びついている。

11. 結び

ドンシエールの兵営の魅力的な友人は、だれもがその兵営を想像できる、ある意味で当時としては非常にわかりやすい名前であるモンタルジから、作家の過去の思いを凝縮し、自らと愛する者の名、愛する土地の名の記憶と時間をまとう、ロベール・ド・サン＝ルー＝アン＝ブレとなった。

「コンブレの教会の石畳の床のモデルがサン＝ピエール＝シュル＝ディーヴであったのか、それともリジューであったのか [...] ステンドグラスについては、あるものはエヴルーを、あるものはサント＝シャベルや、ポン＝トドメールをヒントにしました」とプーレストが語る時、読者はそのその一つひとつにイメージを重ねてゆく。あるいは、「くだんのソナタについてなら [...] サン＝トゥーヴェルト夫人の夜会の場面では、私の好きな作曲家ではありませんが、サン＝サーンスの「ピアノとヴァイオリンのためのソナタ」に出てくる [...], 同じ夜会の少し先でまた小楽節が出てくるときには「聖金曜日の歓喜」のことを思い浮かべ」と語る時、読者は音楽に耳を澄ます。「サン＝カンデ氏の片メガネについては [...], フォレストル氏の片メガネについては [...], フォレストル氏の [...], フロベルヴィル將軍の [...]」と語る時、それぞれの片メガネを目に浮かべようとする。「ジルベルトが雪の降る日にシャン＝ゼリゼにやってくる場面で念頭にあったのは [...], 一瞬のことですが、スワン夫人がティル・オー・ピジョンのそばを散歩するとき私がモデルにしたのは」という言葉によって、文字の世界は映像となる。作品の外にある言説もまたプーレストの作品を豊かにする⁴¹。

作品のなかにはめ込まれた三人称小説「スワンの恋」のスワンとオデットという『白鳥』によって対になる名前にはまた、シャルルとオデットという狂

気の王を主題とするオペラ『シャルル六世』の二人の主人公を暗示するのではないかという指摘もされている⁴²。ジルベルトとアルベルチヌという作品構造を担う名前もまた、一方では「ジルベルト」という男の子のような名前と「アルベルチヌ」という大公妃のような当時としては珍しい名前の組み合わせであった⁴³。一つの語が喚起するものは一つのイメージではない。そして名前には読者には知れずに終わるかもしれない、作家自身のさまざまな思いが込められている。

「ロベール」、「ロベール・ド」、「サン」、「サン＝ルー」「ロベール・ド・サン＝ルー」「サン＝ルー＝アン＝ブレ」というそれぞれの音を口にするとき、作家のなかにはどれほどの世界が広がるのか。ここにとりあげたものがすべてであるはずはない。しかし、その一つひとつが作家のイメージを垣間見せてくれる。名前は、そのスルスが明らかになるにつれ、友人たちを母を教会を土地を風景を音を光を匂いをまとい、ブルーストの水中花の如くにほどけるのである。

注

- 1 Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 4 vol., Gallimard, 1987-1989. 以下、巻数とページ数を本文中に記す。
- 2 Girardot et Ballot, *Documents relatifs à la ville de Montargis et au siège de 1427*, Chez Chrétien, Montargis, 1853.
- 3 D. Cornet, *Le siège de Montargis par les Anglais (1427)*, Librairie Roger, Montargis, 1903.
- 4 この二つは、『モンタルジ攻囲—1427年の勝利』というタイトルで2003年に再版されている。(《Le siège de Montargis, La victoire de 1427》, Société d'Emulation de l'arrondissement de Montargis, Montargis, 2003)
- 5 *Le Château de Montargis d'hier à aujourd'hui*, Association pour la Sauvegarde des Remparts, 2007, p.20.
- 6 *Carte départementale LOIRET*, Institut Géographique National, 2006.

- 7 *France Normandie*, Michelin, 1999.
- 8 Jean-Paul Labadie, *Le Chemin de fer de Lorris*, p.11.
- 9 Jean-Yves Tadié, *Proust*, NRF, 1996, p.125 ; Clovis Duveau, 《Proust à Orléans》 in *BAMP*, n°33, 1983, p.9-68.
- 10 Jo Yoshida, 《La genèse de l'atelier d'Elstir à la lumière de plusieurs versions inédits》, *BIP* n°8, 1977, p.15-28 ; Akio Wada, 《La formation des noms de personnages dans la genèse de *À la recherche du temps perdu*》, Colloque franco-japonais sur la genèse de l'œuvre dans la littérature française 《Comment naît une œuvre littéraire ?》 — Brouillon, contextes culturels, évolutions thématiques —, Institut franco-japonais du Kansai, le 7 décembre 2007.
- 11 Akio Wada, *ibid.*
- 12 *Correspondance de Marcel Proust* (以下 *Correspondance*), texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb, Plon, XVII, 《À Jacques de Lacretelle, [Paris, 20 avril 1918]》 p.193.
- 13 Roland Barthes, 《Proust et les noms》, *Le degré zéro de l'écriture suivie de Nouveaux essais critiques*, Seuil, 1972 (Œuvres Complètes II, Seuil, 1994, p.1368-1376.)
- 14 Serge Gaubert, 《Le jeu de l'Alphabet》 in *Recherche de Proust*, Points, 1980, p.76.
- 15 *Correspondance I* より。
- 16 Evêque de Troyes en 427, né à Toul, mort à Troyes en 479.
- 17 Evêque de Lyon en 523, mort en 542.
- 18 Archevêque de Sens en 609, né à Orléans, mort à Sens en 623.
- 19 Saint-Gilles, né à Athènes en 640, mort en 720.
- 20 © insecula.com
- 21 コルプは、1903年4月10日（聖金曜日）ブルーストが、エマニュエル・ピベスコ、アントワーヌ・ピベスコ、フランソワ・ド・パリ、ジョルジュ・ド・ロリス、リュシアン・エルノー、もしかするとロベール・ド・ピイとその妻とともに車で、プロヴァン、サン＝ルー＝ド＝ノー、ダムリー＝レ＝リスを訪れたとしている。(《*Correspondance III*, p.20

- 22 《Art-roman.net》ホームページより。
- 23 *Correspondance III*, p.21 ; 《À Antoine Bibesco, [Le mercredi soir 8 avril 1903]》 p.295.
- 24 *Ibid.*, 《À sa mère [Le jeudi soir 16 juillet 1903]》 p.373.
- 25 *Correspondance XII*, 《À Emmanuel Bibesco, [Fin mars ou début avril 1913]》 p.119.
- 26 *Correspondance XVII*, 《À Madame Straus, [Le vendredi 31 mars 1918]》, p.270.
- 27 「サン＝ルー・デスラン旅行案内所」ホームページより。
- 28 《Notre-Dame de Seine et Forêt》ホームページより。
- 29 L'exposition 《La Cathédrale d'Amiens et le quartier Saint Leu》より。
- 30 Clovis Duveau, *op.cit.*
- 31 *Correspondance I*, p.9-27, p.54-60, p.135-163.
- 32 Jean-Yves Tadié, *op.cit.*, p.123-138.
- 33 *Correspondance I* より。
- 34 Clovis Duveau, *op.cit.*, 《L'écho de l'année orléanaise dans l'œuvre de Marcel Proust》, p.39-67.
- 35 『評伝ブルースト』吉川一義訳 筑摩書房 2001年 p.117. (Jean-Yves Tadié, *op.cit.*, p.136)
- 36 Clovis Duveau, *op.cit.*, p.16.
- 37 Jean-Yves Tadié, *op.cit.*, p.126.
- 38 Clovis Duveau, *op.cit.*, p.42.
- 39 《Mon rêve est d'aller une fois avec toi si tu as un jour de congé à l'Isle Adame, ou Olivet près d'Orléans pour aller en barque avec toi.》 (*Correspondance VII*, 《À Robert Proust [Juillet 1907?]》, p.221)
- 40 *Orléans agglomération*, Plan Guide Blay-Foldex.
- 41 *Correspondance XVII*, 《À Jacques de Lacretelle》, p.193-197.
- 42 和田恵里 「ブルーストと精神医学—ジュール・コタールをめぐって—」青山大学フランス文学論集復刊第15号 2006年 p.73.
- 43 青柳りさ 「ブルーストとバルベール・ドールヴィイーもう一人のアルベルチーヌ—」年報フランス研究第24号 1990年 p.169-178.

(あおやぎ・りさ フランス文学)

(2007年10月31日受理)